

21世紀農業を支える技術開発のスタート

～消費者の理解の上に立って～



角屋場長

石油エネルギー等の利用により省力・快適作業でものの豊かさを追求した20世紀農業から、地球温暖化防止や心の豊かさを求めた「安心」「安全」「環境」「循環」がキーワードの21世紀農業が始まりました。

地球規模的には21世紀は食料と環境の時代とも言われますが、食料の多くを海外に依存し「飽食」に慣れてしまっている我が国では、消費者と生産現場である農業・農村との距離が遠ざかり、再生産が難しい農産物価格を求められる等、国内生産の基盤は危うくなっています。

これまでの試験研究は生産を担う農業者サイドで行ってきましたが、これほど消費者の食料や農業、農村への理解が薄れてしまった今日、「食農不一致」のままではこれからの農業研究の継続は難しくなります。しかも、技術開発・普及のスピードよりも国際化、自由化の波の方が速く大きく、国内農業は国際競争力を失いつつあり、このままでは開発した技術もその受け手が農村に居なくなる恐れさえあります。

農業は自然循環機能や生物資源の活用で資源循環を図り、食料、環境問題の解決に大きく貢献しますが、それには消費者の理解と応援を受けて農業者が農村で自信と誇りを持って生産活動に励まなければなりません。技術開発は生産農家の所得向上と高品質、新鮮、安全な農産物を求める消費者ニーズの両方を満たす必要があります。試験研究・技術開発が果たす役割に期待はありますが、農業が生命産業として位置づけられ「身土不二」、「地産地消」という言葉を農業者と消費者が共に理解し、農業者が元気になってこそ農業試験場で開発した技術が生きてきます。

(農業試験場長 角屋 正治)



田植機を利用した水稲湛水直播栽培 (マット直播栽培)

稲作の省力低コスト技術として、育苗管理作業を省略できる「直播栽培」があります。しかし、直播栽培を行おうとした場合、新たに専用の水稲直播機を購入しなければならず、作付面積の小さい農家にとっては、直播栽培のメリットはわかっているが、なかなか手がでないのが現状ではないでしょうか。

このたび、大部分の稲作農家が使っている田植機を水稲直播機として汎用利用する‘マット直播栽培技術’を開発しました。

この方式は、花器資材として広く普及しているフェノール樹脂発泡体マットに水稲種子（乾粃、催芽粃、カルパーコーティング粃のいずれもOK）を埋め込み、この種子マットを田植機に載せて‘田植え感覚’で直播栽培ができるもので、下記の三点で構成されています。

- ① 「マット」
- ② 種子をマットに埋め込む「種子マット調整機」
- ③ 田植機に取り付ける専用の「かき取り爪」

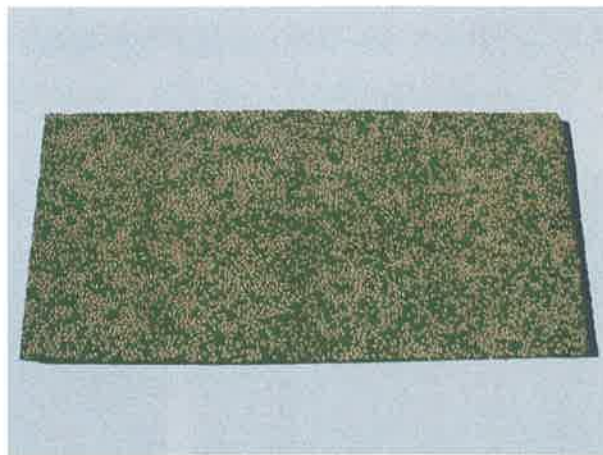
これらについては、当農業試験場で開発した試作機を基にメーカー段階でも製品化の動きがあり、現在、広範な普及を目指して、各種栽培試験及び現地実証試験を行っています。

また、このマット直播栽培方式は、水稲の他に転作田における飼料作物や景観形成作物の直播栽培も可能であり、幅広い発展性を秘めた技術として注目されています。

（栽培技術部 桑原 恵利）



水田での直播栽培の実際



マットに種子が埋め込まれた種子マット

「らくラック」システム 5.5トンも！

～山口型イチゴ高設栽培現地実証試験成績検討会開催～

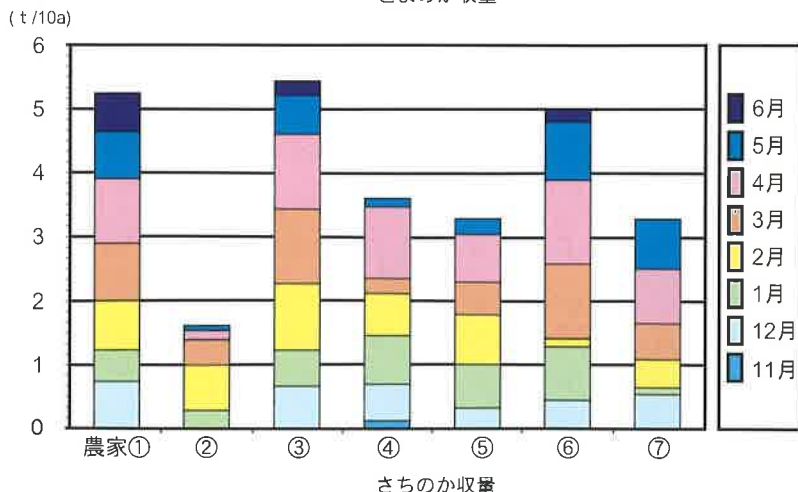
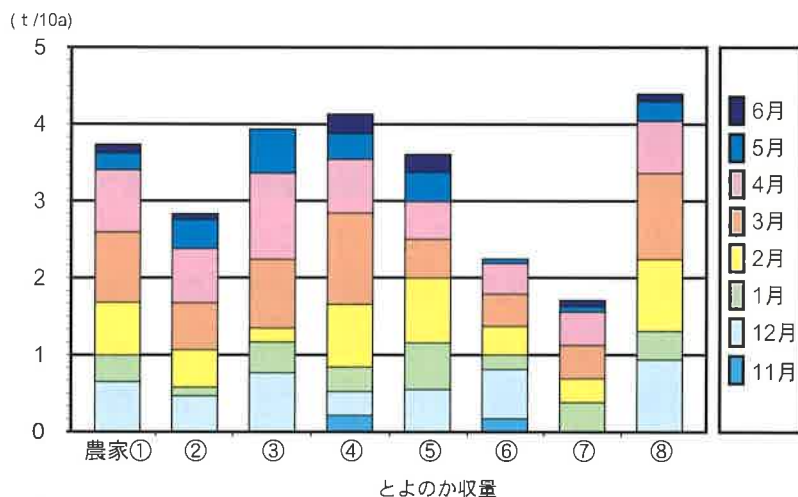
山口県農業試験場が県内企業(株)サンポリと共同開発したイチゴ高設栽培システム「らくラック」の現地実証試験成績検討会を7月5日に開催しました。

この検討会は、平成12年度に県内15カ所で実施した実証試験の結果を基に、今後の取り組みについて協議するもので、関係機関・団体の関係者や担当農家など約110名の参加がありました。



平均の10a収量は「とよのか」が3.4t、「さちのか」が3.9tで、多収事例としては「さちのか」

で5.5tが報告されました。



「らくラック」システムを導入したことにより「作業が楽になった」、「内成りなので冬場の収量が安定していた」など高く評価する意見が出されました。

これらを踏まえて、多収へ向けての具体的な技術対策を検討し、部材や施肥に関する指摘・提案に対しては、関係機関が早急に対応することになりました。

農業試験場では、さらなる低コスト・省力化に向けて、ラックを利用する育苗体系の確立などの技術開発を行うことにしています。

(栽培技術部 重藤 祐司)

伝統野菜の紹介

とっくり大根



周防灘に面した周南工業地帯のすぐそばの新南陽市かせ河原町、羽島の段々畑で栽培されています。

徳利型をした小型のダイコンで、柿の木での乾燥は初冬の風物詩になっています。歯切れの良さが売り物の沢庵加工が中心ですが、辛味を活かしての薬味利用等も提案されています。

収穫期は12月上中旬です。

笹川錦帯白菜



錦川の下流、錦帯橋に近い岩国市錦見で、昭和20年代に野崎白菜から改良された品種です。今も錦見地区で自家消費や贈答用に栽培されています。

早生系で、葉に毛が少なく、葉色の淡い、軟らかい品種で、水炊き、サラダ、浅漬け等に適しています。

収穫期は11月下旬が主です。

(徳佐寒冷地分場 片川 聖)

《豆知識》 シクラメンえそ斑紋病

シクラメンえそ斑紋病は、ミカンキイロアザミウマなどのアザミウマ類が媒介し、葉にえそによる斑紋症を生ずるウイルス病です(写真)。本病原ウイルスは多犯性で、花き類を中心に34科の植物で被害が報告され、海外では花きの重要病害とされています。県内では平成12年に初めて花き栽培ハウスで発生が確認されました。



被害防止、蔓延防止のため、アザミウマ類の防除、伝染源となる発病株の除去、アザミウマ類の増殖場所となる周辺の除草などが必要です。

本病と思われる花き類のえそや斑紋症状の発生を認めた場合は蔓延防止をはかるとともに農業試験場、農業普及部、病害虫防除所などへ連絡してください。

(病害虫部 山本 顕司)